



明治六年、冬、臣命ヲ奉
 陸ぬ地方ニ赴クヤ其土俗
 鄙陋、民産ノ貧微、爲
 何ノ策カ之ヲ文明ノ緒就
 カシムヘキヲ考ヘ終ニ精越
 罪ヲ忘レ
 鳳加馬巡幸
 事ヲ議セリ、當時核
 會未タ思シカウガレモ其
 祝ノ廟美ト相符シ其喜
 少シク社カレラ信スヤ
 時會既ニ来ル臣ノ喜悅豈
 高ナラニヤ其都陋貧甚
 民俗ヲ化シテ開明、爾
 其基ヲ立ルモ此盛業
 蓋才一著ノ方法其臨
 駕ヲ賜ル地方幾許カ
 ソレ幸福ノ恩賚ヲ蒙
 被スヘキ抑臣曩ニ乞フ教
 育都ニ承ケ澤テ之ニ服
 事スト雖其能ヤ之ニ若
 ンナク其況ヤ少ク時ニ合
 ぬヲ以テ久ク既ニ其職ヲ辭
 レ戸位ノ罪ヲ免シラ思フ
 ハテ未タ敢テ之ヲ果サレモ



レテ未タ敢テ之ヲ果サハルモノ
臣ノ微力ホ或ハ涓埃ニ補ア
ラズ信スルニ由ルノミ今乃テ
其考案ノ非ナルヲ知ル臣此
於テ宿望全ク純ヘ本職ニ
任リ以テ素餐ノ罪ヲ重ヌ
リカウサルノ念ヲ登セリ然ト
雖モ臣叨ニ其去就ヲ輕クシ
馬蹄快ヲ呼フノ流ニ比スルヲ
好マシヤ他ノ我ヲ捨ルニ非ナリ
我ニシテ他ニ背クニ忌ニス是臣
進退終始遂ニ聊カ其内情
ヲ吐露シ以テ別ニ請願スル
所アルナリ之ヲ公聞ニ得
ルニ巡幸ニ供奉ノ官
既ニ其人ヲ定メラルト臣ヲシ
テ更ニ陪隨ノ榮ヲ蒙ムラシ
ムル固ヨリ理ノ正ナル者ニアラ
ザルヲ知レリ然レ氏亦未タ必
シモ贅餘ニ属セサルヘシ俯テ
請フ臣ノ情故ヲ諒シ公儀
ノ際試ニ之ヲ陳辯シ賜
テ誠惶敬懇